

台風被害を乗り越えた先に 抱いた循環型農業への誇り

千葉県匝瑳市で2つの養鶏農場と大型のGPセンターなどを運営、6次産業化から更に循環型農業へ踏み込んでいるのが「九十九里ファームグループ」だ。しかし昨年、関東地方を襲った令和元年房総半島台風15号で甚大な被害を受けてしまう。今、復活に向かう同グループの軌跡を追った。

台風で受けた被害で 全員が一丸となる

「思い出すとね。たまらないんですよ……」
7月に九十九里ファームグループの代表を父親から引き継いだばかりの林共和さんは、語りながら目を赤くした。

2019年9月、超大型の台風15号が東日本に上陸。進路上にあった同社を直撃し、2つの養鶏場とGPセンターなどが甚大な被害を受けた。

なかでも被害が大きかったのが、かねてから林さんが代表を務めてきた「サンファーム」の鶏舎だ。バブコックB400という白玉鶏を中心に3万6000羽を有していた3ロット。そこが台風上陸初日に停電した。バックアップ用の発電機を稼働させて難を逃れたが、翌早朝に突然故障し、空調が停止した事で、鶏舎はサウナ状態に。鶏は半日持たなかった。

「3時間後、なんとか予備の発電機を持ってきてもらったけれど……3万2000羽が死んでしまいました。苦しんだ様子が鳴く声が忘れられないんですよ。スタッフ総出で若い鶏の息絶えた体を抜き出しましたが……辛くて、悔しくて、悲しかった」と林さんは振り返る。

それから11カ月が経った今、サンファームは被災前の形に復旧しようとしている。むしろ以前にも増して活気に満ち溢れている様子さえある。

「大きく悲しい経験だったが、大きな学びもありました。何よりこれまで積み上げてきた私たちのやり方の正しさを知るきっかけにもなったんです」

ヒナから育て、自家飼料にこだわり 「鶏を身近に感じる」

千葉県の北東部、成田空港にほど近い千葉県匝瑳市。九十九里平野の田畑が広がるこの地に、九十九里ファームグループはある。2つの養鶏場合わせて約55万羽を飼養し、年間の卵の出荷量は約1万t、従業員数は約100名という中規模農場だ。

創業は1968年。林さんの父親の功さんが自宅裏庭で養鶏を始め、その後、立ち上げた「九十九里ファーム」から始まった。「生協向けに直販の卵を直売する事から始めました。だから安心・安全で、質の高い卵を作るのが、当初から一貫したポリシーなんです」と功さん。



九十九里ファームグループ代表の林共和さん(右から4人目)と興さん(右端)と功さん(左から3人目)、従業員と関係者の皆さん

九十九里ファームグループ



千葉県匝瑳市野手5731
従業員/99名(内養鶏部32名)
飼養羽数/544,000羽



千葉県匝瑳市野手

そのため、初期の頃から「ヒナから育てる事」と「自分たちで飼料を作る事」を続ける。

自家育雛は高リスクだが、鶏の生態を実感できる。目の行き届いた飼育が可能となり、質の高い卵作りにつながるという判断もあった。

自家配合飼料は、現在6割ほど与えている。トウモロコシ中心の植物性原料を加えたオーソドックスな配合だ。しかし「胚芽だけ部取りする」といった部分粉碎をせず、できるだけ全て粉碎して餌にし、自然な形で栄養摂取を意識している。加えて、「ヒナや鶏の体調を見ながら、配合内容を調整するなど小回りを効かせられる事こそがメリットだ」と林さんは言う。

「最適なコストで質の高い卵を生産できますからね。ただ、くみあい飼料さんにも餌を頼んでいます。量が安定するし、自家飼料と比べると勉強にもなります」

2つある養鶏場のうち「九十九里ファーム」では赤玉鶏のボリスブラウンを主に飼養。「サンファーム」では白玉鶏のバブコックB400を飼養し、「九十九里パッケージセンター」で包装。関東近県の卸先へ提供している。流通面で最も注目したいのは、早期からの6次産業化だ。

行列のできる「卵かけごはん専門店」でファンやリピーターを獲得

98年、まずは九十九里ファームの敷地に農場直売

ムグループが借り受けた。今ではその土地をグループ内の野菜部が、自家製野菜の生産・直売に活用している。

「借りている農地を含めると21haで野菜を作っています。酪農も少し手がけていますよ」

荒れ果てていた農地を活用する事で、環境保全と地域の活性化となる取り組みは、九十九里ファームのブランドの礎になった。「あそこなら農地を任せたい」という地域の信頼を得たからだ。加えて社会貢献や地域活性化の意識が強い、若い人材のリクルートにもつながった。そして、台風からの復興へと話はつながってくる。

死んでいった鶏から

多くの学びを与えてもらった

昨年の老朽化した発電機の故障から得られたものは大きい。当時は、死んでしまった3万2000羽をとにかく抜き出す必要があり、生き残った鶏の集卵も行わなくてはならなかった。そこで活きたのが若手の力だ。野菜部の人間も手伝ってくれて、みんなが毎日のように22時、23時まで手を動かしてくれた。

地元の横のつながりも効果的だった。林さんは6次産業化や地域活性化に力を入れていたため、周辺の養鶏場との連携も強かった。台風上陸の前から養鶏場の経営者仲間と連絡を取り、応援を出し合うなどした。「九十九里ファームとGPセンターは被害がまだ少なかったので、応援製造などもできました」



九十九里ファームグループ代表の林共和さん



- ①自家製飼料などを使って生み出される美味しい卵
- ②鶏卵を選別する汚卵検査装置
- ③GPセンターで各農場から集まった卵の出荷作業を行う
- ④台風を乗り越えた鶏たち
- ⑤地元の高校生の絵が飾られる自家配合飼料工場
- ⑥空調設備の整った鶏舎

所をオープン。そして翌年には国道沿いに、卵を使った手作りロールケーキなどの自家製洋菓子の店「手作りのお店 たまご屋さん」を開いた。6次産業化には利益率を上げる狙いも当然あったが、「卵を美味しい状態で食べてほしい」という意味が強かった。

「手作りの餌でヒナから育てた鶏の恵みである卵ですからね。素朴な手作りの味で、素材の味を伝えられた」

大きな反響があったのは3店舗目だ。

「日本人だったら卵かけご飯だろう」。先代・功さんの着想で、2009年に卵かけご飯専門店「たまご屋さん Cocco」を立ち上げた。新鮮な生卵を、隣町・多古町のブランド米「多古米」とともに出す。しかもみそ汁がついて360円（現在は価格改定）で食べ放題という破格の値段設定だ。

「これも父の思いつきで。世代的な感覚で『みんな腹いっぱいご飯を食いたいだろう！』と（笑）」

そのユニークな業態からテレビの旅番組に取り上げられて、一躍人気に。翌日から店沿いの道路が渋滞となるほどの大盛況となった。更に口コミなどで評判が広がり、県内のホテルから「卵を使いたい」とオーダーが。関西や北陸などの遠方から通販の依頼も入るようになった。

また販売チャネルと認知度を増やすために同時に進めてきたのが、「循環型農業」への取り組みだ。養鶏場から出る鶏糞を肥料として販売する試みは以前からあったが、高齢化や跡継ぎ問題から手放さざるを得なくなった近隣の田畑を九十九里ファーム

また、養鶏仲間の被害状況をまとめて、農林水産省に提案。非常用発電機の補助事業の実現をバックアップした。この際には、災害時の発電機の取り扱い注意方法などを啓蒙する勉強会も実施したという。

「学びにして次に活かしたい。伝えたいからね」

林さんは死んだ鶏からさえ学びがあったという。発電機が壊れた3ロットのうち、生き残った鶏は過去最高レベルの成績で卵を産み続けた。なぜか――。

「鶏が減った分鶏舎の1羽あたり容積が増え、環境が良くなったんだと思います。現在、生後440日目で産卵率94%ですよ。密度を減らして、ゆつたりと育てたほうが収益率が上がるかもしれない。台風被害で死んでいった鶏たちが、何かを学ばせてくれた気がするんです」

丁寧に鶏と接し、美味しい卵を求めてきた平時の姿勢が、しなやかに復興への底力となった。

ピンチをチャンスにすら変えそうな勢いだ。もうすぐ自家配合飼料工場が新設。会社見学で「こんな農場が身近にある」と感激してくれた地元高校美術部の生徒に作図をお願いした循環型農業の壁画が飾られる。これからも林さんたちは、卵や野菜や鶏、そして人々の希望や未来までを作っていく。